若者から考える日韓交流の「これから」
―授業実践を通じた歴史認識問題と日韓共通課題への模索―

名古屋外国語大学　福島みのり

はじめに

日韓国交正常化 60 周年を迎えた今年は、日韓各地でさまざまなイベントが開催されている。政治家も顔をだす記念式典や両国の大使館が主催するイベントをはじめ、コンサートや展覧会など文化芸術イベント、日韓関係の「これから」を問う学術シンポジウム、一般の市民が気軽に参加できるお祭り風のイベントまで、どちらも賑やかで盛り上がっている。

イベントの中でも、日本のマスコミが熱心に取り上げるのが「朝鮮通信使」の行列を再現するイベントであった。「『朝鮮通信使船』261 年ぶりに大阪入港…万博の韓国ナショナルデーにあわせ復元」(『読売新聞』、2025 年 5 月 13 日)、「『朝鮮通信使』でたどる日韓友好の跡―国交正常化 60 年で高まる関心」(『朝日新聞』、2025 年 6 月 21 日）など記事のタイトルを読んでもわかるように、はるか昔の江戸時代から友好な関係を長年築き上げてきた「朝鮮通信使」は日韓関係のシンボルになっている。

先日、私は駐日韓国大使館で開催された「日韓交流祭り」に参加した。「日韓友好」「相互理解」を掲げ、一般市民による対話、韓国の方による日本留学体験談、K-POP ダンス公演など多彩な催し物で組まれていた。だが、私は正直、こうした類のイベントには違和感を感じる。日韓国交正常化 60 周年を記念し、より「深い議論や学び」を期待するのは無理なのだろうか。

日本の若者は、日韓関係への歩みを漠然と捉えているように見える。依然日本社会において「政治に関する発言」はタブー視され、「社会問題」に関してもそれほど関心を寄せる若者はあまり見られない。その影響からか、社会・歴史との接点をなかなか見い出せずに「もやもやしている若者」が多々見られる。高校までの歴史の授業といえば、縄文・弥生時代からはじまり、平安・鎌倉・江戸時代までが中心に語られ、最も学ぶべき近現代史における日本の朝鮮半島に対する植民地支配、そして戦後の現代史を詳細に学ぶ機会をほとんど得られないのが現状といえる。日韓の間に何があったのかを知らぬまま社会人になるのである。こうした状況の中で、日韓の間に依然存在する葛藤や対立は棚上げし、過去の都合の良い例である「朝鮮通信使」や K-POP にはまっている日本の若者の様子だけを取り上げているのである。

毎年行われる言論NPOの世論調査に「日韓関係の相手国に対する印象」が公表される。2023 年度の調査によると、相手国に「良い印象を持っている理由」として、日本側は「K-POP やドラマなど韓国のポップカルチャーに関心があるから」が 47.3%(昨年度 44.7%）とほぼ半数を占めており、「韓国の食文化や買い物が魅力的だから」が 34.2%（昨年度 43.4%）と続く。韓国側は「日本人は親切で誠実だから」が 49.8%（昨年度 63.8%）と昨年度に比べて 2 割以上減少している一方、「日本の食文化やショッピングが魅力的だから」が 24%（昨年度 18.4%）と続く。これらの回答から日本側は k-pop、k-drama、k-movie などの韓国大衆文化、新大久保ブームに見られるチーズタッカルビなどの k-food への関心が高い一方、韓国側は日本人の人柄とともに、日本の食文化・ショッピングを楽しむ層が徐々に増えていることが伺える（現在は円安が長期化していることも一つの要因といえる)。

一方、「良くない印象を持っている理由」として、日本側は「韓国人の中に日本への根強い反発や対抗意識が見えるから」が 64.9%、「竹島をめぐる領土対立があるから」が 36.3%である一方、韓国側は「韓国を侵略した歴史について正しく反省していないから」

が 65.4%と高い数値となっており、つづいて「独島をめぐる領土対立があるから」が50.4%を占める。相手国に「良い印象を持っている理由」や「良くない印象を持っている理由」は、世論調査をしなくても、みな直感的に感じているのではないだろうか。そのため「良くない印象」、つまり葛藤と対立は棚上げし、良い印象の方をもっと取り上げたい気持ちはわからなくもない。だが、日本の若者が葛藤と対立の根本にあるものを直視しない限り、本当の友好関係は築けないのではないだろうか。

この点と関連し、BTS の原爆 T シャツ騒動が記憶に新しい。2018 年、世界的な人気アイドルグループ BTS（防弾少年団）のメンバ―一人が、原爆のキノコ雲が描かれた T シャツを着たことで日本中が一瞬騒めいた。日本のマスコミは一斉に「不謹慎だ」という非難のメッセージを送り、日本での BTS 番組出演は取り消しになった。だが、ここで日本の若者が見落としているのは、原爆が投下されたことで韓国（朝鮮半島）は日本の植民地支配から解放されたという事実である。日本の若者はこの事実をどれだけ認識しているのだろうか。

以上のように、日本社会の現状、若者の認識や姿勢から、日韓の間にある葛藤や対立、ひいては「不和」を大学の講義に取り入れることに、私自身長年躊躇していた。だが、講義科目『韓国・朝鮮の近現代史』の授業で、ドキュメンタリー『ナヌムの家』や、映画『タクシー運転手―海を越えて』を見せたところ、驚くべきことに、かなりの学生が映画に感動して涙を流し、映画を通じて自分が発見したことを感想文に書いたのである。私の心配は、取り越し苦労になってしまった。以下、「韓国・朝鮮の近現代史」の授業で扱った映画、ドキュメンタリーなどを通じて、学生が主体的に韓国の歴史を自己物語として読み解いていく様子を考察する。

１．日本の若者はドキュメンタリー『ナヌムの家』をどのように読み解いたのか

毎年、近現代史の授業を進めていく中で、最初に扱うテーマは「従軍慰安婦ハルモニ」の生涯である。『ナヌムの家』（ビョン・ヨンジュ監督／1995 年）は、従軍慰安婦問題を初めて正面から取り上げたドキュメンタリー作品でありながら、韓国国内でも長年忘れられていた存在であるハルモニたちの素顔を撮った作品でもある。

『ナヌムの家』は「分かち合いの家」を意味し、被害者であるハルモニたちが京畿道広州市で静かに暮らしている共同住宅の名称でもある。映画が始まると、穏やかな表情でのんびりと暮らし、楽しく話していると思えば、急に激怒し、また安らぎの心で絵を描いたり、お茶の間で穏やかな表情で集団生活をしているハルモニたちの様相をフィルムに収めた作品である。正直、この作品を学生に見せる際にはいつも多少緊張感が走る。なぜなら、高齢となったハルモニたちの安らいだ表情と同時に、日本政府に対する気性の激しい怒りを露わにしたときは、学生が動揺するのではないかと私自身躊躇するからである。

日本の植民地時代、まだ少女であった彼女らは「いい仕事がある」という話に乗せられ、結果として強制連行・強制売春を強要された。「早く死にたい。生きていても仕方ない。死ぬ前に一度でいいからいい服を着たかった」と語ったハルモニの言葉が忘れることはできない。私は毎年授業で『ナヌムの家』を学生たちと観るのだが、学生がどのようにこの映像を観たのかが気になり、鑑賞文が提出するまで緊張感が走る。比較的、女子学生が多い講義のため、当時のハルモニたちの存在そのものをきちんと受け入れる女子学生が予想外に多く見られる。『ナヌムの家』を観て書いた学生の意見書の一部を紹介する。

彼女たちの語る戦争の記憶や、現在の生活に対する思いが非常にリアルに描かれており、観る者に深い感銘を与えます。彼女たちの苦しみや悲しみが伝わってくる一方で、彼女たちの強さや希望も感じられる作品でした。特に印象に残ったのは、元慰安婦たちが見舞金ではなく賠償金を求めるという発言です。この発言は、彼女たちが単なる同情や一時的な支援ではなく、過去の行為に対する正式な謝罪と責任の認識を求めていることを強く示しています。見舞金は一時的な慰めに過ぎず、根本的な問題解決にはならないという彼女たちの主張は、非常に説得力があります。賠償金を求めることで、彼女たちは過去の過ちを正

式に認めさせ、再発防止のための具体的な行動を促そうとしているのです。さらに、元慰安婦たちが「生きている間に解決したい」とデモに積極的に参加している姿も非常に印象的でした。この場面は、彼女たちの強い意志と決意を感じさせ、過去の苦しみを乗り越え、現在もなお正義を求めて闘い続けています。彼女たちのデモへの参加は、過去の出来事を忘れず、次世代に伝えようとする姿勢の表れであり、深い敬意を感じました。

このドキュメンタリー映画を観ることで、戦争の悲惨さやその影響が現在にまで及んでいることを改めて考えさせられました。彼女たちの物語は、単なる過去の出来事ではなく、現在も続く問題であることを強く感じました。本ドキュメンタリーから、歴史を学び、過去の過ちを繰り返さないための重要性を再認識しました。 (大学２年生　Ｔさん)

意見書を読んで驚いたのは、終始ハルモニの顔、声、身振りにフォーカスを与えている本ドキュメンタリ―映画のアプローチのおかげではあるが、学生が日本や韓国というナショナリティを超え、過去の戦争で犠牲となったハルモニたちの生涯を真摯に受け止めていることであった。ハルモニたちが街頭デモを通じて見舞金ではなく賠償金を求めていること、日本政府に正式な謝罪と責任を求めつづけていることに感銘さえ受ける。これまで文字を持たずに生きていたハルモニたちは、自らの過去から現在の生き様を、苦しみや悲しみが交じり合った「証言」によって訴え続けてきたといえる。事実、長い歴史の中で男性は文字を習得したものの、多くの女性は文字を習得する機会が得られなかった。唯一過去の記憶を語る術は「証言」であった。このドキュメンタリー映画は、まさに文字を持たない女性たちの「証言」であり、日本の若い 20 代の学生にも説得力がり、生の歴史を接するきっかけになったのではないだろうか。その点で、文字をもたなかった彼女たちの歴史は、「もう一つの歴史(＝Herstory)」として捉える必要があるのではないだろうか。

２．映像から観る光州民主化運動

映画『タクシー運転手－約束は海を越えて』（チャン・フン監督／2018 年）も、毎年、韓国語や韓国の近現代史の授業で視聴する。歴史を再現した映画を通じて、過去に韓国で起きた事件とその事件に巻き込まれた人々の思いを、現在日本で暮らしている若者の観点から読み解くのが一つの狙いである。

1980 年５月、ソウルのタクシー運転手のマンソプは、ドイツ人記者のピーターに高額の運賃を提示され、満面の笑みを浮かべながら彼を光州へ送り届けることになる。一方、戒厳令下の現地では、後に光州事件と呼ばれる韓国現代史上に残る民主化運動が起きていた。老若男女問わず、一般市民が歌を歌いながら抗議デモを行うものの、武装した軍人が市民に向けて発砲しはじめる。この光景を目にしたマンソプの心情は 180 度変わる。銃弾に撃たれ、倒れた市民を自分のタクシーに乗せて病院まで送り届けるなど、混乱の中で奮闘する。戒厳軍の銃に撃たれ、生き絶えた人々があまりにも多いため、臨時に作られた安置所には、棺にすら入れられず放置されている遺体が床に並べられている。ピーターは、光州事件の悲劇の瞬間を心の痛みを抱き続けながらカメラを回し続ける。ここ光州で起きた真実を世界に伝えるために、そして後世に残すために危険を冒してでもカメラを回し続けた。必死にカメラを回しながら、かろうじて 2 人はソウルに戻る。ピーターは記録したフィルムを無事にドイツに持ち帰り、光州で起きた悲劇を世界に伝える。彼は最後までマンソプとの再会を望んだが、結局再会できず本映画は幕を閉じる。

この映画を観終わると、多くの学生が衝撃を受け、今まで何も知識がなかった韓国の近現代史について考えはじめる。「韓国という地域性」から普遍的な人権や民主主義につながっていく視点を得る学生も多々見られる。

1980 年、光州事件を知らずにこの映画を見ました。軍隊と市民が戦い合っている姿をみて、実際に韓国国内でこのようなことがあったことが恐ろしく感じました。若者たちが軍人に躊躇なく攻めるのには、

それほど民主主義の回復、戒厳令解除の申し立てに強い信念を持っての活動だったのだということがしっかりと伝わり、政治にあまり興味を示していない現代の日本の若者とは全く違うなと思いました。
　この光州の若い市民が起こした暴動の全てが悪いとは思えませんでした。国民として自国を立て直すのに危険を冒してでも立ち向かう姿には、自分や日本の若者と比較して感動しました。私ももっと日本の政治にしっかり目を向かい、責任感を持ちながら政治と向き合おうと思わされました。（大学 4 年生／S さん）

日本の近現代史についてあまり知らない若い世代が、隣国の歴史から民主主義への信念、市民としての責任感について考えはじめるのも興味深い。意見書の中には、切迫したタクシー運転手の状況を「自分のことだけでなく、誰かのために動く勇気の大切さを感じた」というコメントが印象的であった。

本映画を観て、私は「普通の人」が変わっていく姿を見て深く考えさせられました。主人公マンソプは最初、自分と娘の生活やお金のことだけを考えていましたが、光州での理不尽な出来事を目の当たりにし、人々を助けようとする行動に変わっていきます。その姿から、自分のことだけでなく、誰かのために動く勇気の大切さを感じました。また、外国人記者、ピーターの存在もとても印象的でした。韓国国内で報道が制限されていた中で、彼は命を懸けて光州で起きている事件や真実を世界に伝えようとします。その姿勢から、報道の持つ力や責任、そして国境を越えた助け合いの大切さを学びました。実際、彼の撮影した映像が海外で報道されたことで、光州事件の実態が世界中に知られるようになったということにも強く心を打たれました。映画のタイトルにある「約束は海を越えて」は、国や言葉の違いを越えて結ばれる信頼や友情を象徴していると私は思います。マンソプとピーターは背景や立場、人種も異なりますが、光州で起きた事件を一緒に乗り越える中で強い絆を築いていきます。この映画は、たとえ一人であっても、行動する勇気が世界を動かす力になるかもしれないと私に強く教えてくれました。（大学 2 年生／M さん）

この映画は、平凡なタクシー運転手マンソプを主人公に据え、マンソプの心情の変化を描きながら、光州事件を俯瞰するヒューマンドラマである。上記のコメントを読むと、ごく普通の、平凡な人間の目線で光州事件を描こうとした監督の狙いが当たったかもしれない。私がこの映画を選んだのも平凡な人々の観点が気に入ったからである。
　映画の鑑賞が終わると本映画と関連し、ハン・ガンのノーベル文学賞受賞の話をし、「光州事件」を扱った『少年が来る』についても言及すると、学生たちは「光州」を通じて映画と文学の力にあらためて気づくのである。

終わりに　日韓の歴史における「記憶継承」の必要性

　数年前に、私が朝鮮半島の植民地時代における犠牲者の話をしていたところ、ある学生が「それは過去のことで自分には関係ない」と発言し、正直驚いたことがある。「歴史」とは「過去のこと」ではなく、「現在の視点から過去を捉えること」である。その意味で、歴史は常に「現在地」に位置づけられるのである。昨今は、これまでの歴史学の観点のみならず、「人権」「フェミニズム」などの観点から多様な解釈がなされている時代となった。日韓国交正常化 60 周年を迎えた今日、若者世代が多様な視点から日韓関係の歴史を省察し、次世代へ記憶継承のバトンをつないでいくことを期待したい。